

神戸大学の経営機械化展示室が「分散コンピュータ博物館」に認定

神戸大学経済経営研究所
上東貴志教授

神戸大学経済経営研究所・経営機械化展示室が3月11日、「情報処理学会・分散コンピュータ博物館」に認定されました。「国産初の鐘淵（かねがふち）実業製PCS（パンチカード・システム）用分類機など、戦中・戦後に導入された28点の歴史的機器が保存されている」ことが認定理由になっています。神戸でPCS機器が国産化されたことは、ごく一部の関係者以外には知られておらず、その現物が残っていたことは、コンピュータ史の専門家にとっても大きな衝撃でした。

分散コンピュータ博物館は、「規模は小さいながら、貴重な資料を蒐集、展示している組織・施設」に対し、「より多くの方々にその存在を知っていただき、利用してもらえようそれらを情報処理学会の分散コンピュータ博物館として認定する」もので、情報処理学会が2008年度にスタートさせました。現在の認定されている分散コンピュータ博物館は以下の8施設です。

京都コンピュータ学院 KCG 資料館（2008年度）
東京農工大学情報工学科西村コンピュータコレクション（2008年度）
東京理科大学近代科学資料館（2009年度）
東北大学サイバーサイエンスセンター展示室（2009年度）
北陸先端科学技術大学院大学 JAIST 記号処理計算機コレクション（2010年度）
NTT 技術史料館（NTTの歴史的なコンピュータの展示エリア）（2011年度）
計算科学振興財団 高度計算科学研究支援センター展示コーナー（2012年度）
神戸大学経済経営研究所・経営機械化展示室（2013年度）

神戸市では、昨年度の「展示コーナー」（ポートアイランド）に続き2年連続での分散コンピュータ博物館認定となりました。

上記の内容は、当研究所取材協力の下、既に神戸新聞（3月24日）で大きく報じられています。本日の発表では、当該記事では書かれていない「なぜ、今なのか」に力点を置きます。特に、昨年8月に神戸大学が「文理融合型総合研究大学」として文部科学省・研究大学強化促進事業の支援対象機関に採択され、本年4月1日に「計算科学教育センター」が新設されることは決して無縁ではありません。さらに、今回の認定を決定づけた当時の資料が2008年以降偶然にも、本学に保管されていました。本日の発表では、当展示室の重要性ならびにこれらの背景を説明します。